

# SEE WHAT'S FANG+

～FANG+の楽しいことないかな～



2025年3月31日現在

## ■ 銘柄ニュース

日付	銘柄	ニュース
3/4	クラウドストライク	四半期決算を発表。売上高、純利益ともに市場予想を上回る
3/6	ブロードコム	四半期決算を発表。売上高、純利益ともに市場予想を上回る
3/10	サービスナウ	AI新興企業の米ムーブワークス社の買収に関する合意を発表
3/11	メタ	AI向けの自社製半導体をテストしているとの報道
3/12	アップル	新型「MacBook Air」と「iPad Air」を発表。自社製チップ「M3」搭載
3/12	グーグル	ロボット向け生成AIモデル「Gemini Robotics」を発表
3/14	アップル	「AirPods」へのリアルタイム翻訳機能の追加を計画との報道
3/17	エヌビディア	年次開発者会議「GTC」を開催。
3/18	グーグル	サイバーセキュリティ企業ウイズ社の買収合意を発表。過去最大規模の買収。
3/27	マイクロソフト	日本国内2カ所のデータセンターの機能拡充を発表

## ■ 銘柄ピックアップ

### （エヌビディア）

エヌビディアが2月26日に発表した決算は、売上高が前年同期比78%の増収、純利益は80%の増益となり四半期ベースで過去最高を更新しました。生成AI向けの半導体需要増加により、データセンター向けの売上高は前年同期比93%増収となりました。生成AI向けの新製品「ブラックウェル」については出荷の遅延が懸念されていたものの、110億ドルの売上を記録し今後も成長をけん引すると考えられます。

### （ブロードコム）

ブロードコムが3月6日に発表した決算は、売上高が前年同期比25%増収、純利益は4.2倍の増益となりました。AI関連の強い引き合いを受けて、半導体ソリューション部門は11%増収となりました。また、ソフトウェア部門は47%増収となり、買収したVMウェアが業績を押し上げています。

### （クラウドストライク）

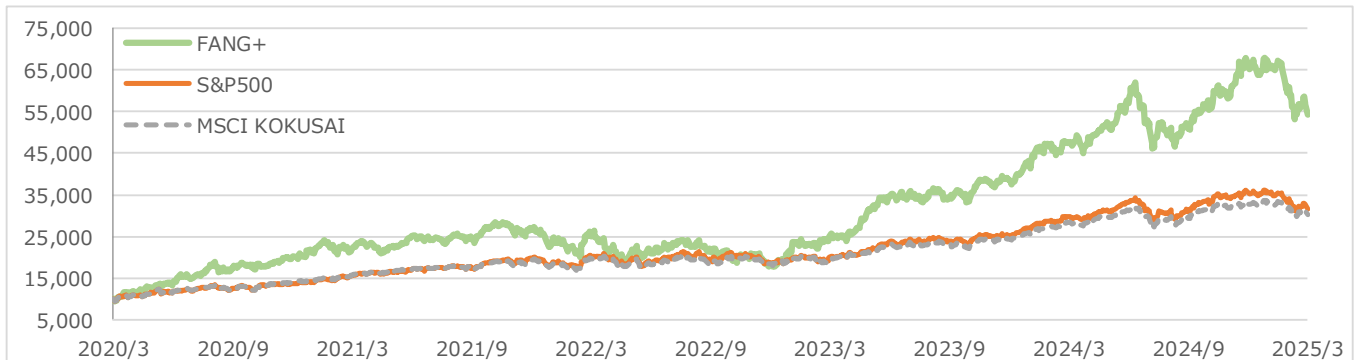
クラウドストライクが3月4日に発表した決算は、売上高が前年同期比25%の増収、純損失は9,200万ドルとなりました。2024年7月の大規模IT障害の影響が懸念されていましたが、市場予想・会社計画を超過する決算となり、契約総額（TCV）は過去最高を更新しました。主力のサブスクリプション部門は27%増収となり高水準を維持しています。

## ■ パフォーマンスハイライト

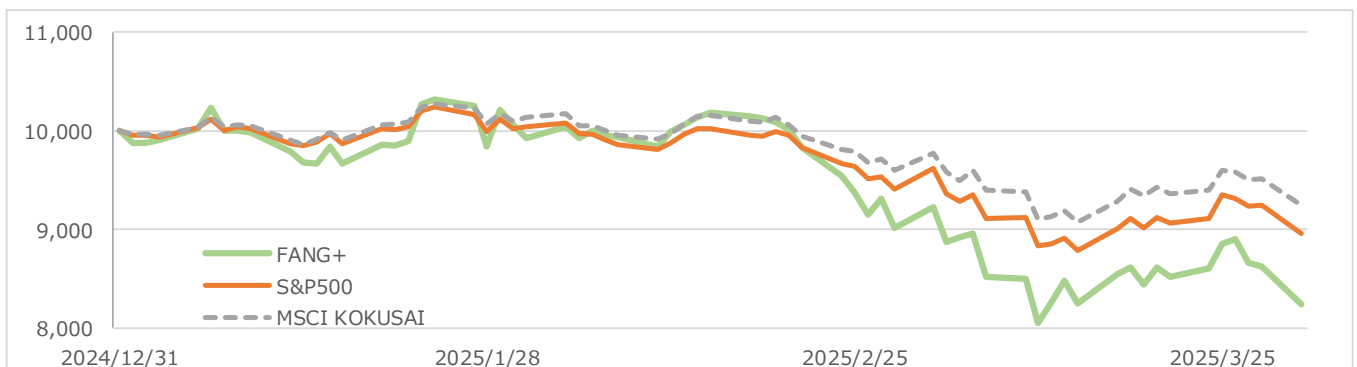
(2025年3月末時点)

構成銘柄	概要	1カ月騰落率	3カ月騰落率	1年騰落率
アップル	スマートフォン、タブレット、パソコンメーカー。iPhoneなどでおなじみ。	▲8.2%	▲11.2%	30.1%
アマゾン・ドット・コム	本、家電から食料品まで取り扱う世界的なネット企業。クラウドインフラサービス市場でも高シェア。	▲10.4%	▲13.3%	5.5%
メタ	インターネットメディア会社。SNS「フェイスブック」を運営。	▲13.7%	▲1.5%	19.1%
グーグル（アルファベット）	グーグル（検索エンジン、Androidなどを提供）を中心として、2015年に立ち上げた持株会社。	▲9.1%	▲18.2%	2.9%
ネットフリックス	動画配信サービスを世界中で手掛ける。近年は自社でのコンテンツ制作が増加。	▲4.9%	4.6%	53.5%
エヌビディア	高性能ゲーム向けの画像処理プロセッサを製造する半導体メーカー。	▲13.2%	▲19.3%	20.0%
マイクロソフト	世界最大のソフトウェア会社。Windows、Officeなどの製品ソフトは市場では事実上のスタンダードモデルとなっている。	▲5.4%	▲10.8%	▲10.1%
ブロードコム	主にブロードバンド通信やネットワーク機器向け製品を手掛ける半導体メーカー世界大手。	▲15.8%	▲27.6%	27.9%
クラウドストライク	エンドポイント（端末や機器など）保護に特化したクラウドベースのセキュリティ企業大手。	▲9.5%	3.0%	10.0%
サービснаウ	クラウドベースのプラットフォームおよびソリューションを提供するソフトウェア企業。	▲14.4%	▲24.9%	4.4%

## ■ 市況グラフ（5年）



## ■ 市況グラフ（3カ月）



※上記内容は、資料作成時点のものであり、今後変更となる場合があります。  
 ※個別企業の騰落率は現地月末ベース（米ドル建配当込み）で算出しています。  
 ※市況グラフは2020年3月末、2024年12月末を10,000として指数化。  
 ※市況グラフは円換算ベース、配当込み。換算方法は現地前営業日の米ドル建て指数に当日米ドル仲値をかけて算出しています。  
 ※当ファンドのパフォーマンスを示すものではありません。  
 ※上記は過去のシミュレーション結果を示したものであり、投資元本の安全性および将来の運用成果を示唆・保証するものではありません。  
 ※MSCI株価指数は、MSCI Inc.が開発した株価指数です。

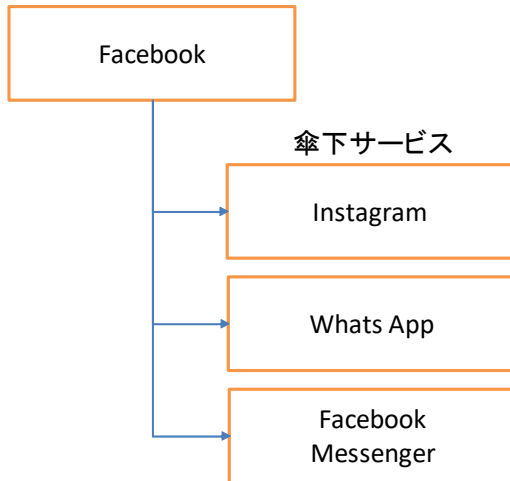
(出所) ブルームバーグ、各種資料より当社作成。



## 会社概要

### メタとは？

2004年に、当時ハーバード大学の学生だった、現CEO(最高経営責任者)のマーク・ザッカーバーグが同級生と始めたサービス、「フェイスブック」が同社のスタートとなりました。もともとは学生だけが参加できるサービスでしたが、その後一般に公開され、日本でも2008年に公開されました。ユーザー数は爆発的に伸び、現在では世界でユーザー数が最も多いSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)となっています。



## グーグル(アルファベット)



## 会社概要

### アルファベットとは？

2015年にグーグルの持株会社として設立されました。組織再編後にグーグルはアルファベット内で最大の会社となり、今までグーグルが抱えてきたインターネット事業以外のさまざまな業種や部門は同社から独立しました。これによりグーグルはスピード感を要求されるITビジネスに専念することができ、ヘルスケアや自動運転などの他の研究部門はグーグルに次ぐ成長の柱となるべく、より積極的な挑戦ができるようになりました。

### グーグルの歩み

グーグルは1998年にスタンフォード大学の二人の学生により創業されました。「世界中の情報を整理し、世界中の人々がアクセスできて使えるようにする」を使命に、二人が開発した検索エンジンは、そのスピードや網羅性、独自のランク付けにより人気を博し、瞬間に世界シェア1位となりました。その後も買収した企業技術を使った「グーグルマップ」を発表したり、動画サイトのユーチューブ(YouTube)を傘下にしたりと、グーグルが提供する無料のサービスは多岐にわたり、現在の私たちの生活にはもはや欠かせないものとなっています。

## 会社の強み

### メタの強み

フェイスブックのMAU(月間アクティブユーザー)は全世界で30億人(2023年6月末時点)で、世界で最も使われているSNSです。また、傘下には写真共有アプリのインスタグラムなどの成長著しいほかのSNSサービスも有しており、フェイスブック単体の業績に頼るといった事業モデルではなくなってきています。

### 今後の展開

同社は2021年10月に社名を「メタ」に変更すると発表しました。今後は仮想空間「メタバース」に関連するビジネスに注力していくことをアピールするためです。同社の収益の大部分を占めるのは広告収益であるため、他社の事業ありきのビジネスモデルであるといえます。今回の社名変更はそうした弱みを解決すべくいち早く「メタバース」への参入を明らかにし、事業の柱としたいという姿勢が見て取れます。同社は2021年だけで約100億ドルを「メタバース」開発に投資し、今後5～10年での収益化を目指しています。「メタバース」がどのような発展・普及を見せるかは未知数ですが、コロナ禍で非対面での接触が当たり前になった今、注目すべきテーマであると考えられます。

## 会社の強み

### 成長持続性

アルファベットの事業収入の8割以上がグーグルにおける広告収入によるものです。グーグルは月間アクティブユーザー数が10億人以上のサービスを複数持ち、オンライン広告において高い優位性を保持しています。特に2000年に始まった検索連動型広告は、「グーグル利用者の検索内容に連動させて自社の広告を表示できる」「利用者のクリック回数によって広告料が決定される」などの広告主にとっては無駄のない画期的な利点があり、テレビ広告などに比べると非常に安価で効果があるものとして拡大し続けています。

また、世界でのインターネット利用人口が順調に伸びていることから、ITインフラであるグーグルの利用者数は今後さらに増加が見込まれています。

### 身近なAlphabetのサービス

Google	検索サービス	
関連サービス	Map(地図)、翻訳、写真、カレンダー(スケジュール)	
	Gmail	メールサービス
	Android	スマートフォン(のOS)
	YouTube	動画配信

※後述の当資料のお取り扱いにおけるご注意をよくお読みください。※銘柄に関する記載は各種資料より当社が作成。※当資料の中で個別企業名が記載されている場合、それらはあくまでも参考のために掲載したものであり、各企業の推奨を目的とするものではありません。また、ファンドへの組み入れや今後組み入れることを、示唆・保証するものではありません。



## 会社概要

### アップルとは？

アップルはインターネット関連製品、デジタル家庭電化製品および同製品に関連するソフトウェアを開発・販売している企業です。1977年の創業時はパソコンの製造販売を手掛けていましたが、現在はiPhoneやiPadなどの携帯端末事業が主流となっています。特に2007年発表のiPhoneは、デザインや操作性などで、以降のスマートフォンの形態を決定付けた革新的な商品であり、世界中の人々の生活を一変させたとともに同社躍進の原動力となりました。

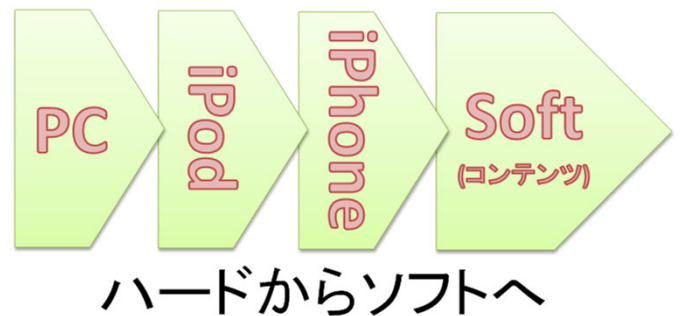
### アップルの戦略

アップルの製品は、原則、他社製品と互換性を持ちません。創業者であるスティーブ・ジョブズの「ユーザー体験にも責任を持つ」という信念が反映されたためですが、この特徴が他社との大きな差を生み出すこととなります。ユーザーに製品を購入させて終わりではなく、製品を通じて幅広いサービスを提供し、結果的に同社製品だけを使わせるという戦略が成功しました。

## 会社の強み

### そしてサービス企業へ

アップルは突出したブランド力を持つことでも有名です。このブランド力を生かして、次の柱として、サービス事業が急速に伸びております。iPod時代から大事にしてきた音楽サービスの他にも、近年はApple News+（新聞、雑誌）やApple TV+（動画配信）などのサブスクリプション（定額サービス）を次々と導入し、iPhone利用者を中心としてシェアを急拡大しております。



## アマゾン・ドット・コム



## 会社概要

1994年に創業された、インターネット上のショッピングサイトを運営する企業で、世界の多くの国で圧倒的なシェアを誇っています。創業者のジェフ・ベゾスは当時広がりつつあったインターネットの将来性に目をつけ、インターネットで本を販売するサイトを立ち上げ、同社設立に至りました。インターネットでわざわざ店舗に出掛けることなく手軽に買い物ができるようになったことは当時としては革新的であり、その後本以外のさまざまな消費財を取り扱うことによりアマゾンは急成長しました。その結果、消費者は既存店に行くことなく買い物を済ませられるようになり、小売り大手のウォルマートでさえ変革を迫られるなど、アマゾン出現による影響は多大です。ジェフ・ベゾスは2021年7月に社長職を退任しましたが、引き続き共同経営者としてアマゾンを支えています。



## 会社の強み

### アマゾン・プライム

これまでの収益源は商品を販売する際の手数料収入等でしたが、現在ではプライム会員とよばれる会員制を導入しています。一般の顧客は月会費（または年会費）を支払うことで、注文した商品の無料配送サービスや、プライムミュージック、プライムビデオなどのサービスを利用することができます。他方アマゾンには、会員から入る安定した収入がもたらされることになります。プライムミュージックでは邦楽・洋楽あわせて100万曲以上が聞き放題で、プライムビデオは映画に加えてアマゾンオリジナルの作品も提供しています。

### クラウド・サービスの巨人にも

近年では、AWS（アマゾン・ウェブ・サービス）を活用したクラウド分野の成長が著しく、収益のエンジンとなっています。



※後述の当資料のお取り扱いにおけるご注意をよくお読みください。※銘柄に関する記載は各種資料より当社が作成。※当資料の中で個別企業名が記載されている場合、それらはあくまでも参考のために掲載したものであり、各企業の推奨を目的とするものではありません。また、ファンドへの組み入れや今後組み入れることを、示唆・保証するものではありません。

※Amazon、Amazon.co.jpおよびそれらのロゴは、Amazon.com, Inc. またはその関連会社の商標または登録商標です。



## Netflix



### 会社概要

#### テレビより楽しい？

Netflixは、月額会員制の動画配信サービスを世界190カ国以上で提供する情報通信サービス企業です。1997年創業の同社は、もともとはオンラインのDVDレンタルサービスを提供していましたが、創業者で現CEO(最高経営責任者)のリード・ヘイスティンガスの指揮の下、2007年から現在のような月額会員制の動画配信サービスを開始しました。

月額会員はコース別に設定された毎月一定額の会費を払うことで、自宅のテレビやスマートフォン、PCなどを用いて、いつでもどこでも視聴することができます。配信される動画はテレビドラマや映画など合わせて数千タイトルにのぼります。

近年、米国では毎年数十万人がCATV(ケーブルテレビ)を解約し、動画配信サービスに流入するといった傾向があります。このような傾向はここ数年続いていて、米国内においてもまだ会員を増やす余地があると考えられます。

# NETFLIX

## Microsoft



### 会社概要

#### ITの巨人

Microsoftは1975年にビル・ゲイツとポール・アレンによって創業されたソフトウェアを開発・販売する企業です。「Word」「Excel」などのPC向けソフトウェア、PC向けOS(基本ソフト)の「Windows」、家庭用ゲーム機の「Xbox」など日本でも広く使われている製品を開発しています。

#### アマゾンに対抗

同社の基幹事業となっているのはPC関連事業ですが、最近ではクラウド分野に軸足を移しつつあります。同社が提供するクラウドサービス「Azure」はアマゾンが提供する「AWS(アマゾン・ウェブ・サービス)」と並んで利用されているクラウドサービスです。サービスの提供開始は「AWS」の方が早かったため、急速にシェアを伸ばしたのですが、2010年にサービスを開始した「Azure」も業界2位のシェアを誇っています。世界のクラウド関連費用は年30%を超える成長率で増大していくと予想されていますが、「Azure」はそれを超える成長率を見せており、「AWS」に追いつく未来もそう遠くないといわれています。

### 会社の強み

#### ネットのハリウッド

同社の強みはなんと言っても自社で制作するオリジナル作品で、2013年から放送されている、米国の政界を舞台にしたドラマシリーズ「ハウス・オブ・カード」がエミー賞3部門やゴールデングローブ賞を獲得するなど、同社はドラマや映画界における主要な賞を受ける作品を生み出しています。近年はこうした作品の制作費にかなりの予算を割いており、予算総額はディズニーなどの巨大フィルムメーカーに遜色ない規模となっています。今後もオリジナル作品制作に巨額の予算を充て競争力を維持する方針です。

最近では映像製作地をアメリカに限定することなく、世界各地の拠点に制作を委任することにより、世界の多くの文化・趣向に合致した作品の発信に成功しています。こうした姿勢が従来のハリウッド企業であるウォルト・ディズニーやワーナー・ブラザーズと異なる点として受け入れられ、今では全世界で約2億人の有料会員を抱える巨大なエンターテインメント企業となっています。

### 会社の強み

#### PCソフトウェアの世界基準

同社の「Word」「Excel」といったソフトウェアは日系企業含め世界中の多くの企業で利用されています。インターネットの黎明期には同様のソフトウェアが乱立していましたが、同社が世界基準を作ったという点で、高い競争優位性を有しているといえるでしょう。OSの「Windows」を含め、一度使い始めた顧客が離れていく可能性が低いブランドとなっています。最近ではこれらのサービスをひとまとめにしたサブスクリプション「Microsoft 365」も企業・家庭を問わず利用されています。

## 会社概要

エヌビディアは米国の画像処理半導体メーカーで、GPU(グラフィックス・プロセッシング・ユニット)で高い市場シェアを持っています。PC市場のマイナス成長が続く中、同社のゲーム関連製品向け売上高は大幅に増加しました。コア層をターゲットとしたゲームの力強い成長やVR(バーチャル・リアリティ)などを利用した新しいゲームの登場による製品需要の高まりを背景に、業績の拡大が続いています。

### GeForce(ジーフォース) RTX 3090



(C)NVIDIA

## 会社の強み

エヌビディアの強みは、GPUに関する優れた技術力です。競合他社に対して半導体の処理能力の高さにおいて優位性があります。同社は、高度な映像処理能力を必要とするゲームが多いPCのみならず、Nintendo Switchなどのゲーム機のメーカーとの協力体制を構築しており、ゲーム産業に欠かせない存在となっています。

また同社は車載半導体にも強みをもっており、半導体の処理能力の高さは今後自動運転技術にも活かされることが期待されています。同社は自動車向けAI(人工知能)音声アシスタント「DRIVE Concierge」と自律走行強化アプリケーション「DRIVE Chauffeur」を発表しました。

同社のこうした技術にはEVメーカーはもちろんのこと、ガソリン車メーカーからも注目を集めており、メルセデス・ベンツやボルボとの協働が決まっています。

## ブロードコム



## 会社概要

### 米国を代表する半導体メーカー

ブロードコムは主にブロードバンド通信やネットワーク機器向け製品を手掛ける半導体メーカー世界大手です。同社は2016年に米PC機器大手であるヒューレット・パッカートの半導体部門「アバゴ・テクノロジー」に買収されましたが、「アバゴ・テクノロジー」がブロードコムの社名を引き継ぎ現在に至ります。それ以来、大規模M&Aにより事業領域を拡大させており、2019年にはサイバーセキュリティ大手の「シマンテック」を買収しました。また、2022年にはクラウド技術大手の「VMware」の買収を発表するなど、ソフトウェア事業領域の拡大を進めています。

## 会社の強み

### 2つの収益の柱

同社は「半導体ソリューション部門」と「インフラソフトウェア部門」を収益の柱としています。半導体ソリューション部門は、半導体の開発・販売を担っており、通信向けの製品が主力となっています。同社の主要顧客はアップルであり、2023年5月には5G関連部品について大型契約を結ぶなど強い結びつきがあります。

インフラソフトウェア部門は近年同社がM&Aによって事業拡大してきた領域です。元々はビジネス向けソフトウェアの設計・開発を行っていましたが、サイバーセキュリティやクラウド技術といったシナジー効果が期待できる企業の買収によって、さらなる成長を目指しています。また、同社のCEO(最高経営責任者)を務めるホック・タン氏は「買収王」と呼ばれており、M&Aを成長戦略の中核として位置付けており、今後の動向に注目です。



## クラウドストライク

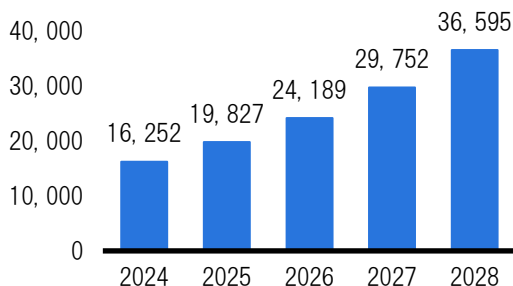
### 会社概要

#### 米国を代表するサイバーセキュリティ企業

2011年にアンチウイルスソフトを開発・販売しているMcAfee(マカフィー)の元役員らが設立したサイバーセキュリティ企業大手です。主力製品の「CrowdStrike Falcon」はエンドポイント(端末や機器など)保護に特化したクラウドベースのセキュリティプラットフォームです。リアルタイムでのマルウェアやランサムウェア、フィッシング攻撃からの保護を提供し、世界中の脅威データを収集・解析することで、迅速に新しい脅威を特定して対応します。サイバーセキュリティ企業として後発ながら、エンドポイント保護分野では世界首位級です。

#### エンドポイントセキュリティ市場の収益見通し

(単位: 100万USドル)



(出所)Statista

## サービスナウ

### 会社概要

#### ITの新興企業

2004年に設立されたクラウドベースのプラットフォームおよびソリューションを提供するソフトウェア企業です。企業のITSM(IT Service Management)をはじめ、多岐にわたるワークフローの自動化や業務プロセスの最適化を支援するソフトウェアを提供しています。当社はクラウドコンピューティングとDX(デジタルトランスフォーメーション)の需要増加に伴い業績を拡大しており、2023年には総収入に基づきランキングされるフォーチュン500に選出されました。

### 会社の強み

#### クラウドベースのセキュリティプラットフォーム

日々多様化しているインターネット上の脅威に対して、同社は革新的なソリューションを提供しました。それが、クラウドベースでのセキュリティシステム提供という戦略です。従来のセキュリティソフトは多様な脅威に対して対応できるものではないうえ、多様な脅威に対応できるよう追加の機能を加えていくと今度は端末の動作自体が遅くなってしまふ、という課題を抱えていました。この課題を解決すべく、同社は基幹機能のみを端末にインストールしたうえで、必要なアプリケーションをクラウド上で提供するという方式で、端末に負荷をかけないセキュリティシステムを構築しました。



### 会社の強み

#### ITSMのメインプレイヤー

ITSMとは企業内のワークフロー管理など社内業務に関するシステムを一元的に運用・管理することを意味します。企業内にはシステム関係の部署だけではなく、営業・企画などさまざまな部署がありそれぞれにITサービスに関するニーズがありますが、それらに対しソリューションを提供し、従業員の満足度向上に寄与するプラットフォームを同社は開発しています。同社のプラットフォームの導入により、さまざまな部署の業務効率化が実現できます。

また、同社のプラットフォームは直感的なユーザーインターフェースと使いやすさに重点を置いており、従業員自身でも迅速に問題を解決できるように設計されています。

## iFreeETF FANG+

316A

追加型投信／海外／株式／ETF／インデックス型

信託期間：2025年1月8日 から 無期限

決算日：毎年6月10日および12月10日 基準日：2025年3月31日

※過去の実績を示したものであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。

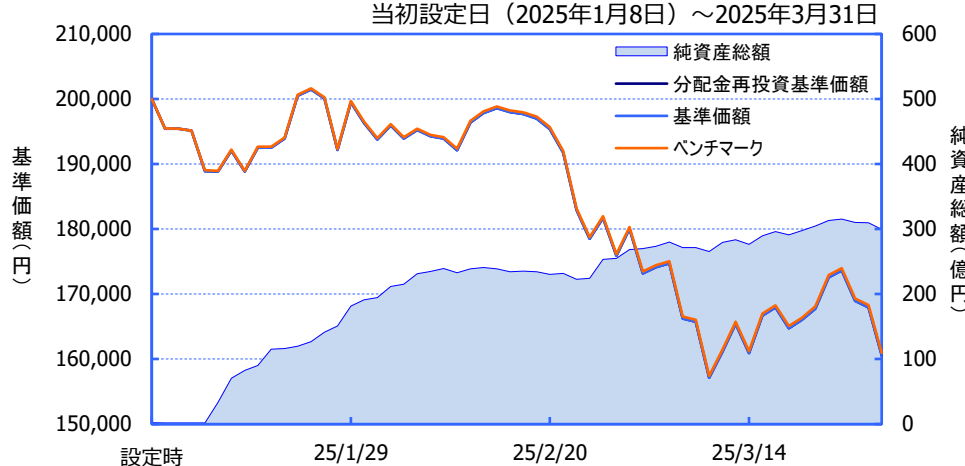
## ◀基準価額・純資産の推移▶

2025年3月31日現在

基準価額	160,622 円
純資産総額	299億円

## 期間別騰落率

期間	ファンド	ベンチマーク
1か月間	-8.7%	-8.6%
3か月間	----	----
6か月間	----	----
1年間	----	----
3年間	----	----
5年間	----	----
年初来	----	----
設定来	-19.7%	-19.5%



※「分配金再投資基準価額」は、分配金実績があった場合に、当該分配金（税引前）を分配時にファンドへ再投資したものとみなして計算したものです。

※基準価額の計算において、運用管理費用（信託報酬）は控除しています（後述のファンドの費用をご覧ください）。

※「期間別騰落率」の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間とし、当該ファンドの「分配金再投資基準価額」を用いた騰落率を表しています。

※当ファンドはNYSE FANG+指数（税引き後配当込み、円ベース）をベンチマークとしておりますが、同指数を上回る運用成果を保証するものではありません。

※グラフ上のベンチマークは、グラフの起点時の分配金再投資基準価額に基づき指数化しています。

※実際のファンドでは、課税条件によって投資者ごとの騰落率は異なります。また、換金時の費用・税金等は考慮していません。

## ◀主要な資産の状況▶

※比率は、純資産総額に対するものです。

## 資産別構成

資産	銘柄数	比率
外国株式	10	97.8%
外国株式 先物	1	2.3%
コール・ローン、その他		2.2%
合計	11	---

## 国・地域別構成 合計100.1%

国・地域名	比率
アメリカ	100.1%

※先物の建玉がある場合は、資産別構成の比率合計欄を表示していません。

※業種名は、原則としてS&amp;PとMSCI Inc.が共同で作成した世界産業分類基準(GICS)によるものです。

※外国株式の国・地域名については、原則としてMSCI Inc.が提供するリスク所在国・地域に基づいて表示しています。

※バーゼル規制（金融機関の自己資本比率規制）等のリスク算定が必要の際は販売会社にご連絡ください。

■当資料は、ファンドの状況や関連する情報等をお知らせするために大和アセットマネジメントにより作成されたものです。当ファンドは、値動きのある有価証券等に投資しますので、基準価額は大きく変動します。したがって投資元本が保証されているものではありません。後述の当資料のお取り扱いにおけるご注意をよくお読みください。

## 通貨別構成

通貨	比率	合計100.0%
米ドル	100.1%	
日本円	-0.1%	

## 株式 業種別構成

業種名	比率	合計97.8%
情報技術	58.1%	
コミュニケーション・サービス	29.7%	
一般消費財・サービス	10.1%	

## ◀分配の推移▶

(100口当たり、税引前)

決算期(年/月) 分配金

初回決算期が到来していないため、  
分配金は記載していません。

分配金合計額

※分配金は、収益配分方針に基づいて委託会社が決定します。あらかじめ一定の額の分配をお約束するものではありません。分配金が支払われない場合もあります。

設定・運用:

大和アセットマネジメント

Daiwa Asset Management

商号等

大和アセットマネジメント株式会社  
金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第352号  
一般社団法人投資信託協会

加入協会

一般社団法人日本投資顧問業協会  
一般社団法人第二種金融商品取引業協会





## 《ファンドの目的・特色》

### ファンドの目的

- ・信託財産の1口当たりの純資産額の変動率をNYSE FANG+指数（配当込み、円ベース）の変動率に一致させることを目的とします。

### ファンドの特色

- ・信託財産の1口当たりの純資産額の変動率をNYSE FANG+指数（配当込み、円ベース）（以下「対象指数」といいます。）の変動率に一致させることを目的として米国の株式（DR（預託証券）を含みます。）に投資します。
- ・毎年6月10日および12月10日に決算を行ない、収益分配方針に基づいて収益の分配を行ないます。

日本語訳は参考として大和アセットマネジメント株式会社が作成したものであり、英語版と日本語訳に矛盾・齟齬等がある場合は、英語版が優先されます。

出所 ICE Data Indices, LLC（以下「ICE データ」）

"ICE" は ICE データまたはその関連会社のサービス/トレードマークです。これらの登録商標について、当ファンドおよび当ファンドのマザーファンド（以下「ファンド」）において大和アセットマネジメント株式会社がNYSE FANG+®指数（配当込み）（以下「指数」）を利用するライセンスが付与されています。大和アセットマネジメント株式会社およびファンドはいずれも、ICE データ、その関連会社またはその第三者供給元によって、スポンサー、保証、販売、または販売促進されているものではありません。ICE データおよびその供給元は、証券投資全般、特にファンドへの投資の妥当性について、または指数が一般的な株式市場のパフォーマンスを追従することについて、いかなる表明保証を行うものではありません。ICE データと大和アセットマネジメント株式会社の関係性は、特定の商標、商号と、指数またはその構成要素のライセンス供与です。指数は、大和アセットマネジメント株式会社、ファンド、受益者に関係なく、ICE データによって決定、構成、計算されます。ICE データは、指数の決定、構成、計算において、大和アセットマネジメント株式会社または受益者のニーズを考慮する義務を負いません。ICE データは、ファンドの発行時期、価格、数量の決定、またはファンドの価格設定、販売、購入または償還に使用される計算式の決定に関与しておらず、その責任を負いません。特定のカスタム指数計算サービスを除き、ICE データが提供するすべての情報は一般的な性質のものであり、大和アセットマネジメント株式会社またはその他の個人、団体、または個人のグループのニーズに合わせて調整されたものではありません。ICE データは、ファンドの管理、マーケティング、または取引に関連する義務または責任を負いません。ICE データは投資顧問会社ではありません。指数に特定の証券を含めることは、ICE データがそのような証券の購入、売却、保有を推奨するものではなく、投資アドバイスとみなされるものでもありません。

ICE データおよびその供給元は、指数、指数値およびそれに含まれる、関連するまたはそこから得られる情報（「インデックスデータ」）を含む、特定の目的または用途に対する商品性または適合性の保証を含め、明示的及びまたは黙示的なすべての保証及び表明を否認します。ICE データおよびその供給元は、指数および指数値の妥当性、正確性、適時性または完全性に関して、いかなる損害または責任も負わないものとし、これらは「現状のまま」提供され、使用者は自己の責任で使用するものとし、

Source ICE Data Indices, LLC ("ICE Data"), is used with permission. ICE® is a service/trademark of ICE Data Indices, LLC or its affiliates. "NYSE®" and "NYSE FANG+®" are registered trademarks of NYSE Group, Inc., an affiliate of ICE Data and are used by ICE Data with permission and under a license. These trademarks have been licensed, along with the NYSE FANG+® Index (NTR) ("Index") for use by Daiwa Asset Management Co. Ltd. in connection with the Products, iFreeETF FANG+ and FANG+ Index Mother Fund (the "Products"). Neither the Daiwa Asset Management Co. Ltd., nor the Products, as applicable, is sponsored, endorsed, sold or promoted by ICE Data Indices, LLC, its affiliates or its Third Party Suppliers ("ICE Data and its Suppliers"). ICE Data and its Suppliers make no representations or warranties regarding the advisability of investing in securities generally, in the Products particularly, the ability of the Indices to track general stock market performance. ICE Data's only relationship to Daiwa Asset Management Co. Ltd. is the licensing of certain trademarks and trade names and the Indices or components thereof. The Indices are determined, composed and calculated by ICE Data without regard to Daiwa Asset Management Co. Ltd. or the Products or its holders. ICE Data has no obligation to take the needs of Daiwa Asset Management Co. Ltd. or the holders of the Products into consideration in determining, composing or calculating the Indices. ICE Data is not responsible for and has not participated in the determination of the timing of, prices of, or quantities of the Products to be issued or in the determination or calculation of the equation by which the Products are to be priced, sold, purchased, or redeemed. Except for certain custom index calculation services, all information provided by ICE Data is general in nature and not tailored to the needs of Daiwa Asset Management Co. Ltd. or any other person, entity or group of persons. ICE Data has no obligation or liability in connection with the administration, marketing, or trading of the Products. ICE Data is not an investment advisor. Inclusion of a security within an index is not a recommendation by ICE Data to buy, sell, or hold such security, nor is it considered to be investment advice.

ICE DATA AND ITS SUPPLIERS DISCLAIM ANY AND ALL WARRANTIES AND REPRESENTATIONS, EXPRESS AND/OR IMPLIED, INCLUDING ANY WARRANTIES OF MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE OR USE, INCLUDING THE INDICES, INDEX DATA AND ANY INFORMATION INCLUDED IN, RELATED TO, OR DERIVED THEREFROM

(“INDEX DATA”). ICE DATA AND ITS SUPPLIERS SHALL NOT BE SUBJECT TO ANY DAMAGES OR LIABILITY WITH RESPECT TO THE ADEQUACY, ACCURACY, TIMELINESS OR COMPLETENESS OF THE INDICES AND THE INDEX DATA, WHICH ARE PROVIDED ON AN “AS IS” BASIS AND YOUR USE IS AT YOUR OWN RISK.

## 《投資リスク》

- 当ファンドは、値動きのある有価証券等に投資しますので、基準価額は変動します。したがって、**投資元本が保証されているものではなく、これを割込むことがあります。信託財産に生じた利益および損失は、すべて投資者に帰属します。投資信託は預貯金とは異なります。**基準価額の主な変動要因は、以下のとおりです。

株価の変動 (価格変動リスク・信用リスク)	株価は、政治・経済情勢、発行企業の業績、市場の需給等を反映して変動します。発行企業が経営不安、倒産等に陥った場合には、投資資金が回収できなくなることもあります。組入銘柄の株価が下落した場合には、基準価額が下落する要因となり、投資元本を割込むことがあります。 当ファンドは、一銘柄当たりの組入比率が高くなる場合があり、より多数の銘柄に分散投資した場合に比べて基準価額の変動が大きくなる可能性があります。 また、特定の分野に関連する銘柄に投資しますので、こうした銘柄の下落局面では、基準価額が大きく下落することがあります。
為替変動リスク	外貨建資産については、資産自体の価格変動のほか、当該外貨の円に対する為替レートの変動の影響を受けます。組入外貨建資産について、当該外貨の為替レートが円高方向に進んだ場合には、基準価額が下落する要因となり、投資元本を割込むことがあります。
カントリー・リスク	投資対象国・地域において、政治・経済情勢の変化等により市場に混乱が生じた場合、または取引に対して新たな規制が設けられた場合には、基準価額が予想外に下落したり、方針に沿った運用が困難となることがあります。
その他	解約資金を手当てするため組入証券を売却する際、市場規模や市場動向によっては市場実勢を押下げ、当初期待される価格で売却できないこともあります。この場合、基準価額が下落する要因となります。

※基準価額の変動要因は、上記に限定されるものではありません。

### その他の留意点

- 当ファンドのお取引に関しては、金融商品取引法第 37 条の 6 の規定（いわゆるクーリング・オフ）の適用はありません。
- 当ファンドは、大量の解約が発生し短期間で解約資金を手当てする必要が生じた場合や主たる取引市場において市場環境が急変した場合等に、一時的に組入資産の流動性が低下し、市場実勢から期待できる価格で取引できないリスク、取引量が限られてしまうリスクがあります。これにより、基準価額にマイナスの影響を及ぼす可能性や、換金の申込みの受け付けが中止となる可能性、換金代金のお支払いが遅延する可能性があります。
- 当ファンドは、金融商品取引所に上場され取引が行なわれます。当ファンドの市場価格は需給等を反映し決定されるため、基準価額とは必ずしも一致するものではありません。

## 《ファンドの費用》

投資者が直接的に負担する費用		
	料率等	費用の内容
購入時手数料	販売会社が独自に定めるものとします。	購入時の商品説明または商品情報の提供、投資情報の提供、取引執行等の対価です。
信託財産留保額	ありません。	—
換金時手数料	販売会社が独自に定めるものとします。	換金に伴う取引執行等の対価です。
投資者が信託財産で間接的に負担する費用		
	料率等	費用の内容
運用管理費用 (信託報酬)	年率0.605%(税抜0.55%)以内 (提出日現在は、 <b>年率0.605%(税抜0.55%)</b> )	運用管理費用の総額は、日々の信託財産の純資産総額に対して左記の率を乗じて得た額とします。運用管理費用は、毎日計上され日々の基準価額に反映されます。
配分 (税抜) (注1)	委託会社	年率0.525%
	受託会社	年率0.025%
その他の費用・ 手数料	(注2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 監査報酬、有価証券売買時の売買委託手数料、先物取引・オプション取引等に要する費用、資産を外国で保管する場合の費用等を信託財産でご負担いただきます。</li> <li>● 受益権の上場にかかる費用および対象指数の商標の使用料(商標使用料)ならびにこれらにかかる消費税等に相当する金額を、受益者の負担として信託財産から支払うことができます。</li> </ul> <p>※提出日現在、商標使用料は信託財産の純資産総額に、年率0.04%を乗じて得た額(ただし、年間150万円を下回る場合は150万円)となります。</p> <p>※提出日現在、上場にかかる費用は以下となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年間上場料：毎年末の純資産総額に対して、最大0.00825%(税抜0.0075%)</li> <li>・追加上場料：追加上場時の増加額(毎年末の純資産総額について、新規上場時および新規上場した年から前年までの各年末の純資産総額のうち最大のものからの増加額)に対して、0.00825%(税抜0.0075%)</li> </ul>

(注1)「運用管理費用の配分」には、別途消費税率を乗じた額がかかります。上記の配分は提出日現在の配分であり、今後変更されることがあります。

(注2) 売買委託手数料などの「その他の費用・手数料」については、運用状況等により変動するため、事前に料率、上限額等を示すことができません。

※購入時手数料・換金時手数料について、くわしくは販売会社にお問合わせ下さい。

※運用管理費用の信託財産からの支払いは、毎計算期末または信託終了時に行なわれます。

※手数料等の合計額については、保有期間等に応じて異なりますので、表示することができません。また、上場投資信託証券は市場価格により取引されており、費用を表示することができません。



## ◀ 当資料のお取り扱いにおけるご注意 ▶

- 当資料は、ファンドの状況や関連する情報等をお知らせするために大和アセットマネジメントにより作成されたものです。
- 当ファンドのお申込みにあたっては、「投資信託説明書（交付目論見書）」の内容を必ずご確認ください、ご自身でご判断ください。
- 投資信託は、値動きのある有価証券等に投資しますので、基準価額は大きく変動します。したがって、投資者のみなさまの投資元本が保証されているものではありません。信託財産に生じた利益および損失は、すべて投資者に帰属します。投資信託は預貯金とは異なります。
- 投資信託は、預金や保険契約とは異なり、預金保険機構・保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。証券会社以外でご購入いただいた投資信託は、投資者保護基金の対象ではありません。
- 当資料は、信頼できると考えられる情報源から作成していますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。運用実績などの記載内容は過去の実績であり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。また、税金、手数料等を考慮していませんので、投資者のみなさまの実質的な投資成果を示すものではありません。
- 当資料の中で記載されている内容、数値、図表、意見等は資料作成時点のものであり、今後予告なく変更されることがあります。
- 分配金は、収益分配方針に基づいて委託会社が決定します。あらかじめ一定の額の分配をお約束するものではありません。分配金が支払われない場合もあります。

販売会社等についてのお問い合わせ

▶ **大和アセットマネジメント** フリーダイヤル 0120-106212(営業日の9:00~17:00)

当社ホームページ

▶ <https://www.daiwa-am.co.jp/>